に聳え、門扉うらさびて風雨にさらされ、破庵軒傾きてまた經聲の聞ゆるなきの處、苔むせる石碑に對して、紅蓮の事を思はゞ、幽魂髣髴として降下するものわらん、

（七月十五日）

○フレーベル會俳句端書集

一、課題　秋季雜吟一人十句以下
一、〆切　八月二十五日限り
一、披露　十月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には美景を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌講讀者は何人にても投吟することを得、用紙は端書に限り（可成繪端書に記載せられたし）住所氏名雅號を明記し都合上必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野奇零

○第一回俳句端書集

山里に平和を唄ふ田植かな　釜山　木戸笹舟
馬曳て歸る野道や飛ぶ螢　同
川形に流れを亂す螢かな　仙臺　立花一瓢
白牡丹誠の色を咲きにけり　同
戀ならで月に恨みや螢狩　長野　蘿月庵天眞
馬借りた禮に手傳ふ田植かな　同
簑笠に老をかくして田植かな　同
蝶も羽を伏せて落付く牡丹哉　東京　福島松水
檜柏子の彼方此方や夏の月　釜山　阿比留藤子
早乙女の手拭白き揃ひかな　同
牡丹散て暫し花檀の別れ哉　東京　久米辰子

夕立や人樣々の逃げ仕度　同
植える田や老も若きも一人前　陸奥　須藤美佐雄
夕風に螢ぶちけり江のあなた　同
夕立や日傘手にして軒の下　愛知　杉山まつ子
うか〳〵と夜を更し息夏の月　福岡　鈴木ひで子
夕立や罪なき馬を叱り行く　山梨　森岡　中子
開く香に夜隈離るゝ牡丹哉　名古屋　津村しづえ
子を抱て扇かぬとこや飛ぶ螢　伊豆　平山やす子
暮色の螢に見ゆる小村かな　安藝　野村　滄洲
戰捷の噺に更けつ夏の月　神奈川　杉崎　雲濤
川添や人去て只螢とぶ　長門　内田　桂崖
灯の消た儘にしてあり夏の月　伊豫　中島　肱山
舟やれば舟の上とぶ螢かな　同
見つけては又失ひり飛ぶ螢　武州　山田　達磨
舟に散る潮の花や夏の月　里の家茶友

波蹴て進む皇艦や夏の月　帶津　善亮
夕立や濡ながら行く植木賣　東京　佐藤　露子
餘念なく螢呼ぶ子や村外れ　横濱　山本富美子
河岸筋は柳にくらし夏の月　境　玉　新井　文冠
門々に高き話や夏の月　群馬　小池　貞子
笹の葉のゆれ込む窓や夏の月　長野　吐月庵
橋越て茶屋も出來たり夏の月　上野　横山　清女
蝶一つ抱て夜に入る牡丹かな　同
四君子に耻ぬ色香や白牡丹　同

○三光

人、舡に征露の吟や夏の月　東京　久米　辰子
地、笠一つ殖にて賑ふ田植哉　仙臺　立花　一瓢
天、星消にて螢飛けり池の上　釜山　鹽谷　柴煙

○追加　無一庵奇零

芍藥も序にはめつ白牡丹

軒添や小雨降る夜を飛ぶ螢
植付けゐ小溝のへりや餘り苗
鯉刎ねて影崩しけり夏の月
夕立や晴れた野末に草の月

海水浴に就きて

人間が海水浴をすると何故効能がありまするか、これはよく患者から質問せられる事で。私は常にかやうな質問に會た時には次の如くに答へる。即ち海水は絶ず波動があつて靜かに動かず止つて居るといふことがないから恰も機械力同樣の作用を以て身体に刺戟を與へる、それが爲に血液の循環を盛んにするそれに海濱の空氣は誠に清淨で市街の汚れた空氣などゝは兎ても比較にならない、この清淨な空氣が充滿て居る海濱に日常の業務を拋つて安逸に一日なり二日なり保養するのは恰度長の冬の日を薄暗がりの小屋の中に繫がれて居た羊が、夏草の青々として滴るゝやうな廣い涼しい牧場に放たれゝやうなもので、前數日、又は數十日の苦しい務をこの二日三日で取返す事となるのですそれにこの海水浴はある病人を除く外、大概の人間に餘り差支へのないもので、それが亦一般普通に能く行はれ易い理由ともなつたのでせう。入浴の時期はわが邦にありましては大抵七八九の三ヶ月を最も適當なものとせられてありますが、もし浴場の設備さへ整頓して居る場所で、殊に多血質の人であれば六月より以前でも亦九月より以後でも決して差支へのあるものではありません。然し茲に鳥渡御注意致したいのは過度の入浴は各種の害を生ずることで浴後の頭痛、內臟の充血、又